

助数詞と対象分類

——文化システムの研究(3)——

金 子 孝 吉

I はじめに

1) 先行論文に引き続き、本稿においても、〈文化システム〉のなかで最も重要な位置を占める〈言語システム〉についての考察をおこなう。今回、主な検討対象とするのは、名詞の数をかぞえる際に付加される「助数詞」(numerative, numeral classifier) という文法現象である。

先行論文では、世界の諸言語に見られる「複数表現の多様性」を取りあげ、言語の多様な複数表現形式と人間の対象認識との関係について考察を試みた。その際、英語やドイツ語など、インド・ヨーロッパ語系統に属する言語と比べて、日本語は複数概念の表示に関してはかなり大雑把な言語であり、複数を表現する文法形式もあまり発達していない言語であることを確認した。確かに日本語には、人称代名詞を除けば、表現すべき対象が単数であっても複数であっても、それを文法的に明確に区別して表示する義務はなかったのである。けれども、そのような日本語であっても、いざ、なんらかの対象の数をかぞえる場合には、その対象が何であるかに応じて、適切な助数詞を付けなければならない。たとえば、本をかぞえる場合には「一冊、二冊」、また紙の場合には「一枚、二枚」、人間の場合には「一人、二人」、動物の場合には「一匹、二匹」(あるいは「一頭、二頭」) というようにである。

日本語におけるこうした助数詞の存在は、私たち日本人にはあまりに当然のことであって、逆に、もしそれが無い場合を想定してみると、事物をかぞえる

1) 拙稿「言語の複数表現の多様性と対象認識について——文化システムの研究(2)——」(『彦根論叢』第325号、2000年、99-120頁)。

ことがほとんど困難に思われるほどである。しかし、日本語とはかなり異なる系統に属する言語を母語とする人が日本語と出会ったときには、数をかぞえる際に助数詞を義務的に使用しなければならないのは奇妙に感じられるようである。

17世紀初頭にイエズス会の通事ジョアン・ロドリゲスが著した優れた日本語文法書『日本大文典』²⁾には、日本語の助数詞についての詳細な記述が載っている。また、1867年(明治元年)に出版されたシーボルトの弟子J・J・ホフマンの『日本語文典』においても、助数詞の説明に少なからぬ紙面が割かれ、"Sika mi-*kasira*"「鹿三頭」, "koi futa-o"「鯉二尾」をはじめとして多くの用例が³⁾列挙されている。「冊」や「枚」, 「本」などの接辞に「助数詞」(auxiliary numeral)という名称を与えたのは、明治初期に東京大学で日本語学を教えていたW・G・アストンであるといわれているが、彼の文法書には、たとえば"Akindo jiu ichi *nin*"⁴⁾のような例があげられている。

その後も、主にヨーロッパ出身の人々が日本語の文法書を執筆する場合には、日本人みずからが作成するときと比べれば、助数詞のために、より多くの説明を費やしているといつてよい。英語やドイツ語、ポルトガル語などでは、人間や事物をかぞえるときに「人」や「個」のような助数詞を付け加えることはないから、そうした文法現象は、彼らの眼にはどうしても珍しいものに映り、またなかなか習得しがたいものに見えるのであろう。かつて今も、日本語とかなり異質の系統に属する言語の話者が日本語を学ぶときには、ある名詞の数をかぞえるにあたって、限りなくあるように思われる助数詞のうちからどれを選んで使えばよいのか、途方に暮れてしまうことがあるようである。

もちろん、ヨーロッパ系の言語にも助数詞的な表現がないわけではない。たとえば英語でも、*water* や *paper* などのような不可算(物質)名詞)をかぞ

2) I・ロドリゲス『日本大文典』(土井忠生訳)、三省堂、1955年、特に811頁以下。

3) J. J. Hoffmann, *A Japanese Grammar*, second edition, E. J. Brill, 1876, pp.147-154.

4) W. G. Aston, *A Grammar of the Japanese Spoken Language*, fourth edition, Kelly & Walsh Ltd., Hakubunsha, Trübner & Co., 1888, pp.36-38. また、奥津敬一郎「助数詞と数量詞移動」(月刊『言語』、大修館書店、1988年5月号、38-39頁)。

える場合には、a cup of や two sheets of といったような助数詞的表現を使う。だが、それらはあくまでも例外的なケースなのであり、日本語のように、森羅万象、人間・動物・植物・事物を表す名詞語彙全体にわたって、それらの数をかぞえる際に、対象にふさわしい助数詞を必ず付加しなければならないということではない。

こうした助数詞の使用が義務づけられている言語は、しかしながら実をいえば日本語だけではない。世界の諸言語を広く見渡してみると、かなりの数にのぼる。とりわけ東アジアの言語やオーストロネシア語族に属する言語、また南北アメリカ大陸に住むインディアンたちの言語は、助数詞を豊富にもっている。日本語の助数詞も多種多様であるが、それらの諸言語において見られる助数詞も、日本語のそれに優るとも劣らない豊饒さと複雑さを備えていて、まことに興味のつきないものである。

本稿では、まず、世界の諸言語における様々な助数詞の用例を概観し、その後、こうした「助数詞」がいったいなぜ存在しているのか、それぞれの言語内においてどのような役割を果たしているのかなどについて考察することにした。

II 諸言語における助数詞の用例

最初に、東アジアの言語における助数詞の用例を見ておこう。私たちの日本語のほかにも、ビルマ語、ヴェトナム語、タイ語、朝鮮語、中国語などにおいてきわめて豊富に助数詞が見いだされる。

まずビルマ語について見てみよう。

lu tə-yau?	「ひと一人」	('ə-yau?: 「普通の人間」)
'əyahyí tə-'û	「高官一人」	('ə-'û : 「地位のある人, 年輩の人」)
phôun-jî də-bâ	「僧一人」	('ə-pâ: 「僧侶, 王族, 神々」)
phəyâ tə-shu	「仏塔一基」	('ə-shu: 「仏像, 仏塔, 仏陀」)
nwâ də-gaun	「牛一頭」	('ə-kaun: 「人間以外の動物全部」)

<i>dou' tə-chāun</i>	「棒一本」	(<i>'ə-chāun</i> : 「細長い棒状のもの」)
<i>cūn-bin də-bin</i>	「チークの木一本」	(<i>'ə-pin</i> : 「植物, 髪」)
<i>bəgan-byā tə-cha'</i>	「皿一枚」	(<i>'ə-cha'</i> : 「薄く平たいもの」)
<i>se'ku tə-ywe'</i>	「紙一枚」	(<i>'ə-ywe'</i> : 「紙, 草木の葉」)
<i>'ein tə-shaun</i>	「家一軒」	(<i>'ə-shaun</i> : 「建物」)
<i>sa də-zaun</i>	「手紙一通」	(<i>'ə-saun</i> : 「書類, 書物, 字の書いてあるもの」) ⁵⁾

上にあげたのはビルマ語の助数詞の一部に過ぎず、このほかにもまだいろいろな種類の助数詞がある。

ヴェトナム語やタイ語、朝鮮語の例についても、少数ではあるが、見ておこう。

〈ヴェトナム語〉

<i>một quy'ên sách</i>	「本一冊」	(<i>quy'ên</i> : 「書籍」など)
<i>một con mèo</i>	「猫一匹」	(<i>con</i> : 「生物」, 「動くもの」)
<i>một cái bút chì</i>	「鉛筆一本」	(<i>cái</i> : 「無生物」, 「動かないもの」) ⁶⁾

〈タイ語〉

<i>hìp nùŋ bay</i>	「箱一つ」	(<i>bay</i> : 「箱・葉・紙幣」など)
<i>ma nùŋ tua</i>	「馬一匹」	(<i>tua</i> : 「動物・机, 服」など)

〈朝鮮語〉

<i>kai han mari</i>	「犬一匹」	(<i>mari</i> : 「動物」)
<i>'jənp'ir han caru</i>	「鉛筆一本」	(<i>caru</i> : 「手で握れるもの」) ⁷⁾

5) 亀井・河野・千野編『言語学大辞典』第3巻, 三省堂, 1992年, 「ビルマ語」の項(特に584-585頁)参照。〔以下の注では, 全6巻(1988-1995年刊)からなる三省堂のこの大辞典を, 『言語学大辞典』と略記する。〕

6) 富田健次『ベトナム語の基礎知識』, 大学書林, 1988年, 特に43頁以下参照。

7) 『言語学大辞典』第6巻, 「数量詞」の項(特に776頁)参照。

中国語はとりわけ助数詞（中国語では普通「量詞」と呼ばれる）がよく発達している言語である。

yí kuài shítou 《一塊石頭》「石一個」(kuài:「石・肉など主として塊状のもの」)

yì zhāng zhǐ 《一張紙》「紙一枚」(zhāng:「平らな面のあるもの」)⁸⁾

その他、中国語には「一本書」、「一座山」、「一只羊」、「一枝鉛筆」、「一条路」など、まだまだ多くの助数詞がある。

日本語の助数詞は中国語から入ってきたものが多く、現在でも両言語に共通して用いられている助数詞がたくさんある。しかし、その使い方については食い違いを見せるケースが少なくない。たとえば、「一条路」の「条」という助数詞は、中国語では、路のほかに狗(犬)をかぞえるときにも用いられる。また、「件」は、日本語では事件などのときに用いられるだけだが、中国語ではそのほかに衣服をかぞえるときにも使われる（「一件衣服」）。さらに、中国語では、人間をかぞえるときに「一箇人、兩箇人……」というように、日本語では事物をかぞえるときに使う助数詞を用いる。このような「条」や「件」や「箇」の使い方は、明らかに現在の日本語における用法とは異なっている。¹⁰⁾

すなわち、言語が異なると、助数詞が付されるべき名詞＝対象物の範囲も異なってくるのである。中国語以外の例も見てみよう。日本語では、薄くて平らなもの、たとえば「皿」も「紙」も「葉」も、「一枚」、「二枚」とかぞえるが、

8) 同所参照。

9) 金田一春彦『日本語の特質』、日本放送出版協会、1991年、206頁などを参照。

10) ただし、「箇」に関していえば、明治時代には日本語でも、ときおり人間を「一個、二個」とかぞえることがあった。たとえば「一個ノ偉人」(矢野龍溪『経国美談』)、「一個の老車夫美人」(泉鏡花『夜行巡查』)といったような例がある。これらは、一種の中国趣味のあらわれと見られ、漢文脈的律動感を出すために用いられたと解釈されている。岡本勲「近代作家の数詞・助数詞」(『日本語学』、明治書院、1986年8月号、36-47頁)を参照。

ビルマ語では、先ほどあげた例で見たように、「皿」と、「紙」・「葉」とでは別の助数詞を用いる。「人間」に付される助数詞についてみても、ビルマ語のように「普通の人間」,「地位のある人, 年輩の人」,「僧侶, 王族」,「墮落した人間」などという細かい区別を設けている言語もあれば、「人間」についてはただ一種類の助数詞しか用いないような言語もある。また、「動物」を意味する名詞に付く助数詞についても、日本語に見られるように「一頭」,「一匹」,「一羽」と細分するものもあれば、そうしない言語もある。同じく助数詞を頻繁に使用する言語であっても、どういったカテゴリーの名詞にどの助数詞を付けるかということは、言語によってかなりの相違があるのである。

次に、オーストロネシア語族に属する諸言語における助数詞を見てみよう。

〈シマルル語〉

<i>da-itu ata</i>	「七人の人」(<i>da-</i> : 「人間」)
<i>itu-fo luma</i>	「七軒の家」
<i>nēm-a-fo manoq</i>	「六羽の鶏」
<i>nēm-ěnga-sikha kapal</i>	「六隻の船」
<i>nēm-ěnga-sikha boea</i>	「六匹の鯨」
<i>tělo-nga-un bon-nol</i>	「三本のココヤシの木」(<i>-un</i> : 「樹木」)
[cf. <i>tělu-fo bon-nol</i>]	「三個のココヤシの実」

〈ボナベ語〉

<i>pwihk rie-men</i>	「豚二頭」(<i>-men</i> : 「生物」)
<i>takai eh-u</i>	「石一個」(<i>-u</i> : 「一般」)

〈サタワル語 (トラック諸語の一つ)〉

<i>ye-fay núú</i>	「ヤシの実一個」(<i>fay</i> : 「塊」)
<i>ye-fórh waa</i>	「カヌー一隻」(<i>fórh</i> : 「長いもの」) ¹¹⁾

今あげたのは、豊富にある用例のほんの一部に過ぎないが、このなかで、スマトラ島西岸沖のシマルル島で話されているシマルル語の助数詞システムについて、もう少し詳しく触れておくことにする。シマルル語の助数詞における主要カテゴリーは、

人間をかぞえる系列……………	da
物および鳥類をかぞえる系列……………	fo
鳥類を除く動物、川、船をかぞえる系列……………	sikha
樹木をかぞえる系列……………	un ¹²⁾

の四つである。この分け方で注目されるのは、動物であるはずの「鳥類」が「物」を表す名詞と同じグループに分類されていること、また、「川」や「船」が「動物」と同じカテゴリーに入れられていることである。sikha は語源的には「分割された一部分」を意味するとのことであるが、それにしても「動物（鳥類を除く）」と「川」と「船」を同一の助数詞を使ってかぞえるというのは、日本人である私たちの感覚からすればやはり少々理解しにくいといえる。同じく助数詞をもつ言語どうしであっても、ある言語における対象のグループ分けの基準は、それ以外の言語の話者からすると、往々にして首を傾げたいくなるようなものであることも多いのである。だが、その問題については、後でまた触れることにしよう。

さて、アメリカ大陸の原住民の諸言語も多様な助数詞をもっている。中央アメリカで話されるマヤ系言語の一つであるハカルテック語では、人間、動物、事物をかぞえる場合に、それぞれ *wan*, *k'on*, *eb'* という異なる助数詞を使う。

ox-wan eb' ix anab'e 「三人の姉」(*eb'* は複数標識)

11) 『言語学大辞典』第2巻、「シマルル語」の項（特に193頁）参照、また同辞典第6巻、「数量詞」の項（特に776頁）参照。

12) 『言語学大辞典』第2巻、「シマルル語」の項（特に193頁）参照。

ox-k'og hejh metx'i7 「三匹の犬」(hejh は複数標識)

ox-eb' hejh te7 nah 「三軒の家」(同 上)¹³⁾

北米ブリティッシュ・コロンビアのツィムシアン語は、アメリカ文化人類学の創始者であるフランツ・ボアズが本格的な調査をおこない、アメリカ・インディアンの言語のなかでは比較的よく知られている言語の一つであるが、その助数詞表現は早くから様々な人々の注目を集めてきた。ボアズによれば、ツィムシアン語は、対象をかぞえる際に次のような七つの異なる数系列を使い分ける。

	一般の勘定	平らなもの	丸いもの	人 間	長いもの	カヌー	尺 度
1	gyak	gak	g'erel	k'al	k'awutskan	k'amaet	k'al
2	t'epqat	t'epqat	goupel	t'epqadal	gaopskan	g'alpēeltk	gulbel
3	guant	guant	gutle	gulal	galtskan	galtskantk	guleont
4	tqalpq	tqalpq	tqalpq	tqalpqdal	tqaapskan	tqalpqsq	tqalppalont
5	kctoñc	kctoñc	kctoñc	kcenecal	k'etōentskan	kctoōnsk	kctonsilont
6	k'alt	k'alt	k'alt	k'aldal	k'aoltskan	k'altk	k'aladelont
7	t'epqalt	t'epqalt	t'epqalt	t'epqaldal	t'epqaltskan	t'epqaltk	t'epqaldelont
8	guandalt	yuktalt	yuktalt	yuktleadal	ek'tlaedskan	yuktaltk	yuktaldelont
9	kctemac	kctemac	kctemac	kctemacal	kctemaetskan	kctemack	kctemasilont
10	gy'ap	gy'ap	kpēel	kpal	kpēētskan	gy'apsk	kpeont

14)

かぞえる対象に応じて異なった〈接尾辞〉(これが助数詞に相当すると見なされる)を数詞に付けるという文法現象は、ヨーロッパ人にはたいそう興味深かったようで、たとえばフランスの哲学者・社会学者レヴィ＝ブリュルは、その主著『未開社会の思惟』のなかで、ボアズが報告したこのツィムシアン語の数のかぞえ方を少なからぬ驚きをもって取りあげ、そのようなかぞえ方と「前論理的な心性」との関係について考察を加えている。

13) 『言語学大辞典』第3巻、「ハカルテック語」の項(特に109頁)参照。

14) Lucien Lévy-Bruhl, *Les fonctions mentales dans les sociétés inférieures*, neuvième édition, Presses universitaires de France, 1951, p.222. [レヴィ・ブリュル『未開社会の思惟』[上](山田吉彦訳, 岩波書店, 1953年, 248-249頁)。

レヴィ＝ブリュルによれば、インディアンの諸言語に見られる助数詞の接尾辞の「異常な豊富さは、これらの言語が殆ど抽象せず、何よりも先ず〈絵画的〉であるというその一般的特質に想到すれば直ちに理解されること」であり、また「劣等社会の心性 la mentalité des sociétés inférieures」においては、「その抽象化は常に、普遍化するというよりはむしろ特殊化することにあるので、この心性はその発達のある階梯で、数詞を形成するにはするけれども、それは我々が使用するような抽象された数ではない」と述べている。¹⁵⁾

カッシーラーも『シンボル形式の哲学』第1巻「言語」のなかで、レヴィ＝ブリュル経由で、ボアズの同じ報告に言及している。カッシーラーの方は、助数詞の発達した諸言語について次のように述べている。「もともと言語には任意の数えうる対象に適用されうるようなまったく一般的な数表現といったものではなく、特定のクラスの対象に対してそれに対応する特殊な数表示を用いるのが通例」であり、「実際、言語形成の原始的な段階では、まだいたるところで数の表示が物や性質の表示と直接に融合しているのが認められる。……すべての数がどの物にでも当てはまるとは限らない。というのも、数の意味はここではまだ、抽象的な多数性一般を表現することにあるのではなく、この多数性の様態や、その種類や形式を表現することにあるからである。……ここでは、数えようとする努力は〈等質性〉とはまるで別な方向へ向けられている」と。¹⁶⁾助数詞を豊かにもつ言語を「原始的な」言語と見なしているのはただけないにしても、カッシーラーの説明は、助数詞を常用している人々における数概念・数把握の仕方について踏み込んだ考察をおこなっている点で、示唆に富むものであることは間違いない。

15) *ibid.*, pp.224, 227. [同訳書, 250-251, 253-254頁]。

16) Ernst Cassirer, *Philosophie der symbolischen Formen, Erster Teil, Die Sprache*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1964, [Reprographischer Nachdruck der 2. Auflage, 1953], S.192f. [カッシーラー『シンボル形式の哲学』第1巻「言語」(生松敏三・木田元訳), 岩波書店, 1989年, 313-314頁]。

Ⅲ 日本語の助数詞とその機能

世界の言語には実に多様な助数詞表現があることはこれで分かったと思われるが、ここで、私たちが普段何気なく使っている日本語の助数詞について、いま一度詳しい考察を加えてみることにしたい。私たちにとっては非常に身近で、使い慣れたものである日本語の助数詞について、いまさら検討すべきことなど何も残っていないように思われるかもしれないが、しかし子細に調べてみると、それが意外に複雑かつ不思議な文法現象であることに気づくのである。

日本語には、それこそ数えきれないほどの助数詞があるといつてよいが、ここではまず、日本語の助数詞の研究家であるパメラ・ダウニングの調査に依拠して、現在日本語で日常的に使用されている助数詞の一覧を列挙することにする（並べてある順番は、彼女がアンケート調査に基づいて報告している〈使用頻度順〉に従った）。

-人「人間」、-つ「無生物」、-匹「動物」、-本「細くて長いもの」、
 -枚「平らで薄いもの」、-軒「建物」、-個「小さくて丸みのあるもの」、
 -色「色彩」、-名「人間（公の場合）」、-滴「液体のしずく」、
 -通「手紙」、-台「乗り物など」、-面「平らな表面」、-冊「書籍」、
 -羽「鳥、兎」、-発「爆発、射撃」、-齣「フィルム、大学の授業」、
 -間「和室の畳の数」、-室「部屋」、-粒「小さい粒状のもの」……¹⁷⁾

そのほかにダウニングが列挙しているのは、「鉢」（植木）、「品」（料理）、「株」（植物）、「件」（事件）、「字」（文字）などである。彼女があげていないもので、現在でも比較的頻繁に使用されていると見なされる助数詞としては、「機」（飛行機）、「曲」（音楽）、「句」・「首」（和歌、俳句）、「隻」、「艘」（船舶）、「着」（服）、「丁」（豆腐）、「頭」（大きめの動物）、「棟」（家屋）などが思い浮かぶ。

17) Pamela Downing, The Anaphoric Use of Classifiers in Japanese. In Colette Craig (ed.), Noun Classes and Categorization, John Benjamins, 1986, p.347.

これらは、現在、日常的によく用いられている助数詞であるが、歴史的に遡れば、いまでは一般的にはほとんど使われなくなった助数詞が結構たくさんある。刀は、細長いものなので、現在なら「本」でかぞえるのが普通であろうが、以前は「一腰」とかぞえていた。武士が身につける鎧も、「一着、二着」ではなく「一領、二領」であった。そのほか、冑は「一劔」¹⁸⁾、薙刀は「一枝」¹⁹⁾、弓は「一張」、袴は「一下」^{くだり}とかぞえていた。玉村文郎によれば、日本では、とくに中世・近世の時代に助数詞のめざましい発達が見られたという。また、そうになったのは、豊富な助数詞をもっていた中国語の影響によると彼は述べている。日本語の助数詞に関しては、現在よりも昔の時代の方が多様であったといえるのである。

上にあげた古風な助数詞群は現在ほとんど用いられなくなっているが、それは、それらの助数詞が廃れたというより、それらが付されるべき鎧や冑のような事物自体が、現代では実際の生活の場で稀にしか出会わないものになったことによると考えられる。ということは、日本語の助数詞の多様性が昔と比べて減っているのは、日本人が生きていくうえで出会う事物・事象の種類が昔よりも少なくなったということなのだろうか。もちろん、そんなはずはないのであって、日本人が日常生活を送っていく際に経験する事物・事象は、誰が見ても、現代の方がはるかに多くなってきているのである。にもかかわらず、ここ数十年の日本人の言葉使いを観察してみれば、現在に近づけば近づくほど、日本人が通常使用する助数詞の数は減少している。また、それと並行して、どの名詞にどの助数詞を付けなければならないというような規則による締め付けも、だんだん緩くなってきているようである。たとえば、机や椅子は、正しくは「一脚、二脚」とかぞえるべきなのだろうが、現在では「一個、二個」あるいは「一つ、二つ」とかぞえても、それを間違いだと責める人は少なくなってきている。日本語で日常的に使用される助数詞は、現在、「個」とか「つ」などの汎用性のある助数詞、「枚」、「本」、「匹」などの基本的な助数詞に、しだいに

18) 奥津敬一郎、前掲論文(1988年)を参照。また、寿岳章子「私の助数詞意識」(『日本語学』、明治書院、1986年8月号、90-97頁)参照。

19) 玉村文郎「数詞・助数詞をめぐる」(『日本語学』、明治書院、1986年8月号、12頁)。

統合・整理される方向にあるといえるだろう。とくに、世代が若くなると、極端な場合には、人間や動物以外の無生物を、なんでもすべて「個」あるいは「つ」を付けてかぞえることさえ見受けられる。

日本語は昔と比べてなぜ多様な助数詞を使い分けなくなったのだろうか。レヴィ＝ブリュルあるいはカッシーラー的な立場からすれば、それは日本人の数概念がようやくヨーロッパ的な〈抽象性〉^{しるし}に向かい始めた徴だということになるのかもしれない。ようやく日本語も、具体性にいつまでも密着し続ける原始的な言語から脱却し始めたというわけである。だが、そうではないだろう。なぜなら日本語は、助数詞の多様性を確かに減少させつつあるにしても、将来、ヨーロッパ系言語のように、普通名詞をかぞえる際の助数詞の義務的使用を完全にやめるようなことは、まずありえないからである。少なくとも、「人」とか「つ」、また「本」とか「枚」のような基本的な助数詞は、間違いなく今後もずっと使い続けられるといってよいだろう。では、日本語の助数詞の整理・統合化は、現代の日本人の助数詞を使い分ける能力が衰退したことに原因があるのだろうか。つまり、現代日本人の教養・知識不足のせいではないかと考えるわけである。それも確かに一因かもしれない。しかし最終的には、そうした現象を引き起こした最大の原因は、現代の日本人が多様な助数詞を使い分ける〈必要性〉をしだいに感じなくなっていることに求められるのではないと思われる。すなわち、助数詞の使用に関する文法的取り決めは確かにいまなおあるけれども、仮にそれに違反した場合でも、多少の違和感や抵抗感を覚える人はいるかもしれないが、それによってコミュニケーション自体が不可能になることはほとんどない、そう日本人の多くが感じ始めたためではないかと思われるのである。難しい漢語系の助数詞をわざわざ使わなくても会話することはできるのだから、そんな面倒なものは必要ないというわけである。確かに、机や椅子を「一脚」とかぞえようが、「一個」・「一つ」とかぞえようが、実際にそれで致命的な誤解がおこることはないといえよう。

だが、そうであるからといって、助数詞が言語的にまったく無意味であるかといえ、決してそんなことはない。それどころか、多様な助数詞を備えもつ

ことによってしか表現できないような現実も、いまなお数多く存在しているのである。助数詞は、言語的に見て、単なる装飾品あるいは余計物ではない。それは意味論的にも語用論的にもちゃんとした役割を担っている。

では、日本語において多様な助数詞が果たしている言語的機能にはいったいどんなものがあるのだろうか。以下、それについて考察していくことにしたい。

まずは、ダウニングがあげている次のような助数詞の使用例を見てみよう。

- a. 「梅一本」 (= 梅の「木」 一本)
- b. 「梅一個」 (= 梅の「実」 一個)
- c. 「梅一輪」 (= 梅の「花」 一輪)²⁰⁾

これは、助数詞を使い分けることによって、対象の注目されている部分の違いを明確に示している例である。「輪」という助数詞を付けることによって、わざわざ梅の「花」といわずとも、花の数を指していることが分かるのである。

あるいは次の二つの文を比べてみよう。

- a. 私は、本を二冊送ってもらった。
- b. 私は、本を二部送ってもらった。

この二つの文は明らかに意味が違う。「冊」は、本などをかぞえるときに用いる助数詞であるが、〈綴じられている〉ことを必要条件とする。それに対し、「部」は〈印刷物である〉ことが使用条件であるが、同時に〈内容が同じである〉ことも条件となっている。従って、bの文の「本」は、二つの本が同じ本であることを示している²¹⁾のである。

このように、「梅」、「本」という同じ名詞であっても、それらに異なった助数詞を付けると、問題となっている対象物をまったく異なった視点から捉えて

20) Downing (1986), p.348.

21) 松本曜「日本語類別詞の意味構造と体系——原型意味論による分析——」(『言語研究』99, 日本言語学会編, 1991年), 99頁。

いることが表示されるのである。すなわち、助数詞には、話し手が、話題にしている対象の、どのような部分、どのような点に注目しているかを、ほんの短い形態素を添えるだけで、はっきり際立たせる機能があるのである。

また、日本の助数詞は、「三匹の猫」というように名詞の前に置かれる場合と、「猫三匹」というように名詞の後に置かれるときがある。名詞の後に置かれる場合には、さらに、「三匹」というようなく数詞+助数詞²²⁾の部分が名詞自体とかなり離れて置かれるケースもある。ダウニングが採取した例を見てみよう。

蝶は板塀に斜線を描いて、隣家の松の前へ出た。三羽²³⁾が縦に並んで、その縦の線を崩さず間隔も乱さず、松の真ん中を速く梢へあがっていった。

この文において、たとえ「三羽」が、文頭にある「蝶」とかなり離れた場所に位置していたとしても、それが蝶を指すことは、蝶を「一羽、二羽……」とかぞえることを理解している日本語堪能者なら、すぐに見当がつくのである。このような場合には、数詞に付けられた助数詞は、一種の代名詞のような働きをしているということが出来る。ダウニングは、これを助数詞の anaphoric (代用語的、代名詞的) 機能と呼んでいる。文章中において〈数詞+助数詞〉の部分が独立して、それが関係している名詞から遠く離れた場所に位置していても、助数詞が数詞に付されているかぎり、その数詞がどの対象物の数を示しているかを私たちは容易に知りうるのである。(同じように、ヴェトナム語、タイ語でも、助数詞は代名詞的な機能を果たすことがある²⁴⁾。)

あるいは、助数詞を使い分けることによって、社会言語学的なレベルにおける意味の違いを表したり、また、いわば間接的に様々なニュアンスが付加され

22) 〈数詞+助数詞〉と〈名詞〉の位置関係については、奥津敬一郎「日中対照数量表現」(『日本語学』, 明治書院, 1986年8月号, 70-78頁) 参照。また、同「連体即連用? 第3回 数量詞移動 その一」(『日本語学』, 明治書院, 1996年1月号, 112-119頁) 参照。

23) Downing (1986), pp.370-371.

24) 富田健次, 前掲書(1988年), 46-47頁, また『言語学大辞典』第2巻, 「タイ語」の項(特に539頁)を参照。

ることもある。

たとえば、人間の数をかぞえるときに、通常の「人」ではなく、「名」や「方」という助数詞が使われることがある。対象そのものは同じ「人間」であっても、「名」を付けてかぞえたときには、いうならばフォーマルな談話であることが示され、「方」をつけたときには、対象となっている人々に対して敬意を表していることが伝わってくるのである。²⁵⁾ 同一の対象であっても、付ける助数詞を変えることによって、社会言語学的な文脈の違いが表出されたり、様々な社会階層の人々とコミュニケーションをはかるうえでの適切な態度がとられることになるのだといえよう。

または、羊羹の場合を考えてみる。多くの日本人はそれを普通は「一本、二本」とかぞえるだろうが、しかし場合によって「一棹、二棹」とかぞえることもある。そのようにかぞえたときには、同じ羊羹でも、なにがしか高級な雰囲気²⁶⁾が漂ってくるとはいえないだろうか。あるいは、昆虫の数については、通常の人なら「一匹、二匹」と勘定するであろうが、昆虫の専門家たちは「一頭、二頭」とかぞえる。²⁶⁾ 鈴虫の鳴く声も、「一声」とはいわず、その筋での正式なかぞえ方は「一振り」、「二振り」であるという。²⁷⁾ また、土地の一区画には「筆」、トンネルや橋には「連」という助数詞を、その分野の専門家たちは用いるとのことである。²⁸⁾

以上のような助数詞には、話し手が公式の場において発言しているのを自覚していることを表示する機能があたり、また、上品さや高級感を醸し出すような効果を生んだり、あるいは、その人がある特定の趣味、学問的・職業的専門分野に深く通暁していることを暗示するような働きがある。このようにして、特別な助数詞を付すことによって、会話や文章が様々なニュアンスを帯びたり、話者・筆者の主観的判断や特別な興味・関心、特殊な知識が付随的に表された

25) 松本曜，前掲論文（1991年），85頁を参照。

26) 日経サイエンス編『養老孟司・学問の格闘——「人間」をめぐる14人の俊英との論戦』，日本経済新聞社，1999年，60－61頁参照。

27) 奥津敬一郎，前掲論文（1988年）を参照。

28) 玉村文郎，前掲論文（1986年），12頁。

りすることがあるのである。

IV 助数詞と対象認識

ここでは、豊富な助数詞を使う言語を母語とする人々が、周囲の世界に存在する事物をどのように認識しているのかについて考察する。

すでに述べたように、英語やドイツ語のようなヨーロッパ系の言語では、主として、かぞえることができないと見なされている〈物質名詞〉の場合に主に助数詞的な表現 (a glass of water とか ein Glas Bier など) が使われるのに対し、日本語やヴェトナム語のように助数詞が発達している言語では、すべての名詞をかぞえる際に助数詞が必要とされる。このことから、助数詞が豊富な言語においては、要するに、そのすべての名詞が〈物質名詞〉的なものとして捉えられているのだと主張する人たちがいる。言語人類学者のウィリアム・フォーリーや、言語相対論の立場にたって精力的な言語研究をおこなっているジョン・ルーシーらである。

彼らによれば、助数詞があらゆる名詞に付加されるような言語においては、名詞は、それ自体形もなく、はっきりした輪郭もない〈素材〉をしか意味しておらず、助数詞が付加されることによって初めて具体的に個々の存在が区別されることになるという。たとえば、英語で letter といったときには、それは、個別の具体的な事物としての〈手紙〉であるが、日本人が日本語で「手紙」といった場合には、——英語で paper とか water とかいうときと同じく——他から切り離されて独立している物体ではなく、いうならば漠然とした〈手紙というもの〉、あるいはその名称で表される概念みたいなもの、を思い浮かべているという。そして、「一通」というような助数詞を付けてかぞえたときに初めて、それを具体的・個別的な事物として認識するに至ると彼らは述べるのである。助数詞言語は、人間を表す名詞でさえも、あたかも〈物質名詞〉のように捉えているのであり、「人間」という名詞が示す意味は、それだけでは、あくまでも漠然とした〈人間というもの〉にとどまっていて、「一人、二人……」というような助数詞を付けることによって、ようやく個別の存在として

浮かび上がってくると主張するのである。²⁹⁾

さらにルーシーは、「助数詞言語を話す人はモノの〈中身〉substancesにより注目し、そうでない言語（たとえば英語）を話す人よりも〈外見〉bodyを気にする度合いは低いのではないか」という見解を提出している。ルーシーはこの説を、助数詞の豊富な中央アメリカのユカテック語の詳細な調査研究を彼がした折りに、現地で話者たちに対しておこなった対象分類に関する心理学的テストの結果に依拠して唱えている。彼が試みたのは、次のような実験である。

彼は、まずユカテック語の話者たちにある事物、たとえば陶製の鉢 bowl を見せた。その後、その事物と形は同じだが材質の違うもの（金属製の鉢など）と、その事物と形は違うが材質が同じもの（陶製の皿など）の二つを見せ、最初に見せたものと同じであるものはどちらであるかを尋ねてみた。すると、ユカテック語の話者たちの多くは、陶製の鉢と同じであるものは、陶製の皿であると答えたという。ルーシーはそれと同じ実験を英語の話者に対してもおこなったが、結果はユカテック語の話者の場合と反対で、形が同じものを選んだ者が多かった（すなわち、陶製の鉢と同じであるものは、金属製の鉢であると答えた）のである。これらの実験からルーシーは、対象を認識する際に、助数詞があまりない英語の話者は〈形〉を優先するが、助数詞が発達したユカテック語の話者は〈材質〉を優先する強い傾向があると主張したのである。³⁰⁾

日本人の子供たちの英語の学習過程を観察した今井&гентナーも、可算名詞／物質名詞の区別が文法上ある言語の場合（英語）は、モノの〈形〉を最重要視し、助数詞で輪郭付けする言語の場合（日本語）は、モノの形よりもその〈素材〉に、つまり何でできているかを表す〈材質〉の方に注意が向く、という結論を引き出している。³¹⁾

29) William A. Foley, *Anthropological Linguistics, An Introduction*, Blackwell, 1997, pp. 235-240. John A. Lucy, *Grammatical Categories and Cognition*, Cambridge University Press, 1992. また、井上京子『もし「右」や「左」がなかったら——言語人類学の招待』、大修館書店、1998年、147頁以下参照。

30) Lucy (1992), pp.136-148.

31) M. Imai & D. Gentner, *Linguistic Relativity vs Universal Ontology: Cross-*

助数詞が発達している言語では、そのすべての名詞が、英語でいう物質名詞と同じであって、それが表す意味は、それ自体は形もなく、はっきりした輪郭もない漠然とした〈素材〉である。そのような言語では、名詞は、助数詞が付くことによって初めて個々の具体的な存在として捉えられるようになる。助数詞が発達した言語の使い手とそうでない言語の使い手のあいだでは、周囲にある対象の認知の仕方に違いがある、というのがルーシーらの主張である。このような説が完全な妥当性をもつかどうかは、現在のところまだ何ともいえない。しかし、従来、とかく余剰物と見なされがちであった助数詞を、人間の外界の認知方法と関連づけて詳細に考察し、人間における対象の認識形式の多様性を探求しようとする試みは、大いに注目を浴びてよいと思われる。

V 助数詞と対象分類

日本語では動物をかぞえる場合に、それが鳥類であるか、小さな動物であるか、大きな動物であるかに応じて、「羽」、「匹」、「頭」などの助数詞を使い分けるが、アメリカ・インディアン人のユロック語では、対象が動物であればすべて同じ助数詞 "-əʔəy" あるいは "-əʔəyɪ"³²⁾ が付く。(ただし日本語では、兎は、鳥類ではないにもかかわらず、伝統的には「羽」でかぞえる。) また、ビルマ語では「馬」と「馬車」は同じ助数詞でかぞえるが、タイ語も日本語も、それぞれ別の助数詞でかぞえる。このように、ある助数詞がどのような名詞群に付加されるかという分類基準は各言語によってまちまちであることは、前にも述べた。それにしても、各言語における名詞の分類原理は驚くほど多様である。その名詞が示すものの形状、用途・機能などで分類する場合もあれば、対象の材質、由来などで分類する場合、人間なのか、それとも動物や植物なのか、それとも無生物なのかで分類する場合、人間であっても、その地位・職業などによっ

↘linguistic Studies of the Object/Substance Distinction. In What We Think, What We Mean and How We Say It: Papers from the Parasession on the Correspondence of Conceptual, Semantic and Grammatical Representations, Chicago Linguistics Society, 1993, pp.171-186.

32) 『言語学大辞典』第4巻、「ユロック語」の項目(630頁以下)参照。

て区別する場合、一般に高級な事物と低級な事物で区別する場合などがあり、まさに千差万別といってよい。ある言語における名詞の分類やその基準が、その言語に疎遠な者にとっては、まったく出鱈目で、混沌としているというような印象しか与えないことも、しばしばあると思われる。

たとえば、タイ語では、馬・鳥などの動物、机や椅子、さらにはワイシャツなどの服、文字までも、同じ tua という助数詞でかぞえるのであるが、こうした分類と最初に出会ったときには、これらの名詞が指し示す対象集団に共通する点が果たしてあるのかと疑ったとしても当然だろう。だが、タイ語の tua という助数詞が、根本的には動物、あるいは〈動物的な形状をしたもの〉に付³³⁾されることを知るならば、机や椅子は四本の脚を備えているし、服もその袖が動物の手足に相当するし、文字にしてもタイ語の文字の形を考えれば動物状だと見なされるということで、そうした分類も納得できるようになるのである。部外者には一見支離滅裂に思えるような分類であっても、そこに働いている根本的な分類原理を一旦見抜くことができれば、その分類がちゃんとした基準にのっとっておこなわれていることが理解可能となるのである。

もう一つ別の例をあげると、ビルマ語には、仏陀、仏塔、仏像などの名詞につく ၵ-shu という助数詞がある。だが、その助数詞は漁の網にも、蚊帳にも、階段にも、庭にも付される。一見してやはり奇妙に思えるこうした対象分類も、ビルマ人が抱いている宗教的世界観を理解すれば納得できるようになる。ビルマの人々の世界観とは、〈仏陀〉こそが宇宙の中心に座を占めており、そのほか世界にあるすべての存在物は、その中心のまわりに、仏陀が備えている深遠な智慧と聖性が乏しくなっていく順に——聖人・僧侶・王族 → 地位の高い人々 → 普通の人々 → 智慧の欠けた人々・動物・幽霊・死骸・墮落した人々、というような順番に——、〈同心円状〉に取り巻いているというものである。漁の網などの事物に、仏陀に付すのと同じ助数詞を使うのは、ビルマ人たちが有している、最高に聖なる〈仏陀〉を中心とした〈円〉的な世界認識方法と深い関係がある。すなわち、ビルマ人たちのあいだでは、漁の網や蚊帳は円錐形

33) Foley (1997), pp.236-237. また、『言語学大辞典』第2巻、「タイ語」の項（特に539頁）。

の形状をしていることによって、また階段は螺旋階段であることによって、庭は車輪のようにレイアウトされていることによって、いずれも〈円〉的なものとして捉えられており、その点で〈仏陀〉の聖性と繋がりと見なされているのである。³⁴⁾

日本語の助数詞でよく使われる「本」も、日本人以外の人々、とりわけ西欧人たちには、不思議な助数詞だと感じられているようである。「本」は、いうまでもなく「細くて、長くて、筒状のもの」をかぞえるときに用いられる助数詞である。鉛筆、煙草、酒の瓶、木、ロープなどに付くのは、外国人にも問題なく理解できる。しかし、写真のフィルムや、電話による通話、映画の上映やテレビ・ラジオの番組、バスや電車の運行数、さらには野球におけるヒットやホームランまで、日本語では「本」を使ってかぞえるのだという、当惑する外国人が多いようである。だが、このような「本」という助数詞の付け方にも、日本人からすれば、そこにはちゃんと首尾一貫した、助数詞の〈拡張使用ルール〉のようなものが働いているのである。フィルムは確かに使用前には巻かれた状態で円形となっているが、実際の使用時には細長くのばされた状態になる。映画の上映も、細長いフィルムを用いておこなわれることから、またテレビやラジオの番組は、映画とのアナロジーから（あるいは、細長いものとしてイメージされる電波によって遠くから流れてくることから）、電話は、電話線という細長いものを通して届くことから、バスや電車は、それらの運行経路が細長い線を描くということから、さらにヒットやホームランは、ボールが細長い軌跡を描いて飛んでいくことから、どれもみな「本」という助数詞を使ってかぞえることができると見なされているわけである。論文や小説も、文章が長く連続していることから、やはり「本」を使ってかぞえるのである。³⁵⁾

また、日本語は、鳥類ではない四つ足動物の〈兎〉を「一羽、二羽」とかぞえることは先に述べたが、それは、日本人が、野原をあたかも飛ぶようにとび

34) Alton L. Becker, A Linguistic Image of Nature: The Burmese Numerative Classifier System, International Journal of the Sociology of Language 5, 1975, pp.109-121.

35) 松本曜, 前掲論文(1991年), 87-90頁, また, ジョージ・レイコフ『認知意味論』(池上嘉彦他訳), 紀伊国屋書店, 1993年, 125-137頁を参照。

跳ねている兎の姿を鳥のイメージと重ね合わせたことからきていると考えられる。

こうして、ある言語における、助数詞を用いた様々な対象のグループ分けの仕方や、助数詞の独特な〈延長的〉・〈比喩的〉な適用方法を詳細に観察していくと、その言語の話者の対象認識の仕方・表象思考の特性——もろもろの対象のいったいどういう点に特に注目する傾向があるのかとか、イメージを連鎖的に広げていくときにどのような独特なプロセスを辿っていくかなど——、さらには、その話者たちが抱えている独自の世界観・価値観をうかがい知ることができるように思われる。ある言語集団における助数詞による対象分類を詳細に研究することは、その言語集団に共通する認知システムや文化システムを探るのにまたとない重要な貢献をなすといつてよいのである。

VI 類別詞と対象分類

助数詞と文法的に非常に密接な関係を有するものに、「類別詞」がある。

「助数詞」は、名詞の〈数〉をかぞえるときにその名詞のカテゴリーに応じて付される形態語（要素）であるが、言語のなかには、数詞を伴っていない場合でも、その名詞のカテゴリーに応じて特定の「類別詞」を名詞に付けなければならないものがある。

たとえば、ヴェトナム語やタイ語などでは、数をかぞえるときに、Ⅱでみたように、対象の種類に応じて適切な助数詞が付されるのだが、数量が問題となっていない場合でも、名詞に、助数詞と同じ形態語を付けるのである。そのような場合には、数詞がないわけであるから、それらは「助数詞」 numeral classifier というより、「類別詞」 noun classifier と呼んだほうがふさわしいことになるのである。

ヴェトナム語の助数詞についてはすでに、Ⅱにおいて、quy²ên（「書籍」など）、con（「生物」、「動くもの」）、cái（「無生物」、「動かないもの」）の三つの例をあげたが、ヴェトナム語の場合、数詞がない場合にも、たとえば、猫を意味する名詞 mèo の前には、生物を表す con という類別詞を付さねばな

らないのである。同様に「犬」は *con chó*, 「男の子」は *con trai* というように、やはり生物であることを示す類別詞が付く。無生物の場合には、*cái* が名詞の前に置かれる (*cái ao* 「衣服」, *cái bàn* 「机」など)。しかし、無生物でも、ナイフや切手、川や道などは「動くもの」と見なされて、*con* が付く。また生物でも、蟻や蜂、鷺などは「動かないもの」とされて、*cái* という類別詞が付くのである。そのほか、鳥類には *chim*, 魚類には *cá*, 樹木類には *cây* というような、それぞれ特定の類別詞が付される (例: *chim se* 「雀」, *cá thu* 「鰹」, *cây tung* 「松の木」)。ただし、鳥類でも、普段あまり飛ぶことがない鶏や家鴨、鷺鳥などは、犬や猫と同じく、*con* という類別詞が付けられる。ヴェトナム語のこうした類別詞による対象分類には、ヴェトナム人の、世界のあらゆる存在物に対する独特な認知方法や価値観などが色濃く反映されていると³⁶⁾考えられている。

Ⅱで少し触れたハカルテック語も、助数詞と類別詞の両方を使用する言語であるが、ヴェトナム語とはまた違って、助数詞と類別詞とでは別の表示システムを備えている少々複雑な言語である。ハカルテック語の助数詞は *wan*, *k'ong*, *eb'* の三種類であったが、類別詞についていえば、次頁の表に示されているように、普通名詞が15種類のクラスに分類されることから、それとほぼ同数の異なった類別詞がある。そのほかにも、人間に関する下位カテゴリー (子供、若者、敬意を受ける人など) に応じたクラスが派生し、それらを合わせれば、計20ほどの名詞クラスが識別されるともいう。

ハカルテック語の名詞のクラス分け表をじっくり眺めていると、こうした分類の仕方のなかに、ハカルテック語の話者たちの生活・社会の様相、身の周りの諸事象の認識方法、諸対象に対する評価、彼らが抱いている世界観、すべてひっくるめて言うならば、彼らが有している〈文化〉の諸特性が、見事なまでに具体的に現れ出ていることが分かってくる。ハカルテック語の名詞=対象分類はいろいろな点で実に興味深いものであるが、とりわけ、家畜のなかでも

36) 富田健次、前掲書(1988年)、43頁以下に、ヴェトナム語の助数詞・類別詞についての比較的詳しい説明がある。また、『言語学大辞典』第6巻、「類別詞」の項(特に1398頁)参照。

	類別詞	名 詞
1	najh	男, 父, 息子, 夫, 病気名 (下痢, 頭痛, 赤痢他), 風, 太陽, 火山など
2	ix	女, 母, 娘, 妻, 月
3	no7	動物: 家畜類 (馬, 豚, 猫他); 野生獣 (ジャガー他); 鳥類 (鷲, 鷹, ケツアル他); 爬虫類・昆虫類 (蛙, 蛇, 蝶, 蝇, 毛虫他); 動物の肉, 卵など
4	metx	犬
5	te7	樹木, 棒され, 植物部位 (葉, 花, 実他), 栽培植物 (綿, トマト, 豆, ジャガイモ他), 果物 (バナナ, アボカド他), ヤシ, 植物性食品, 山, 森など
6	ixim	トウモロコシ, タマル, トルティーヤなど
7	tx'an	竜舌蘭およびその加工製品 (網, ハンモック, 肩掛け袋他) など
8	ha7	水, 雨, 湖, 川など
9	ch'en	石, 岩, 宝石, 指輪, 金, 銀, 鉄, 雪, 氷など
10	tx'otx'	土, 砂, 泥, 塵, 陶器類 (水差し, 水がめ, 偶像他) など
11	atz'am	塩, 岩塩, 黒塩
12	q'ap	布, 服, ズボン, 袋など
13	tx'al	糸
14	ya7	首長ほか, 1, 2に属する名詞に敬意を込めて用いるとき
15	ゼロ	人体部位名 (内蔵, 血他), 人々, 町, 世界, 昼, 夜, 朝, 年, 月, 地震, 雷, 星, 洪水, 火, 煙, 灰, 石灰石, 季節名, 寒さ, 暑さなど

37)

「犬」だけが特別扱いされているのは大変目立つし, また「竜舌蘭」や「塩」, 「糸」も, ほとんどそれだけで一つの独立したカテゴリーに分類されているのも注意を引く。それは, おそらく, ハカルテック語の話者にとってそれらの存

在が彼らの生活上特別に重要な地位を占めていることに由来するといつてよいと思われる。

また、ハカルテック語では、同じ名詞が違う類別詞を取ることによって、意味の区別がなされることもある。

te7 k'ok'wi7e 「(ヤシの葉で編んだ) 帽子」 [te7=樹木のクラス]
 no7 k'ok'wi7e 「(羊毛で編んだ) 帽子」 [no7=動物のクラス]³⁸⁾

これは、日本語の場合でも見たあの「梅一本」と「梅一輪」の区別に通じるものである。また、ハカルテック語も、ヴェトナム語、タイ語と同じように、類別詞が〈代名詞的〉な機能を果たすこともある。³⁹⁾

こうした名詞をいくつかのカテゴリーに分類し、それを「類別詞」によって表示するという言語現象については、すでに別稿においてオーストラリアのデルバル語の四元的分類を論じたときにも言及した。⁴⁰⁾デルバル語では、周囲にあるすべての存在が四つのカテゴリーに分類され、それぞれのカテゴリーに応じて、bayi, balan, balam, bala のうちの一つに基づく類別詞を付けなければならなかったのである。デルバル語において対象を分類する際の基本原理となったのは、次のような基準である。

bayi: (人間の) 男, 動物など

balan: (人間の) 女, 水, 火, 戦いなど

balam: 肉ではない食べ物 (食用果実, ハチミツ, 酒など)

bala: それ以外のもの

こうした対象分類が、オーストラリアの原住民である彼らの狩猟・採集の生活、

38) 同辞典同巻, 同項 (107-110頁)。

39) 同辞典同巻, 同項 (特に109-110頁) 参照。

40) 拙稿「世界の分類について——文化システムの研究(1)——」(『滋賀大学経済学部研究年報』第6巻, 1999年), 56頁以下。

彼らを取り巻く自然・環境の特性や、彼らが独自に展開させた神話、彼らの抱いている世界観・価値観などとやはり密接な関係をもっていることは、別稿⁴¹⁾においても指摘した。

「類別詞」を取りあげるのであれば、アフリカ大陸に広く分布しているバントゥー諸語において見られる豊饒かつ複雑な分類システムを忘れるわけにはいかない。バントゥー諸語でも、名詞はいくつかのクラスに分類され、そのクラスに応じた特有の接辞が名詞に付される。だが、それだけに留まらず、そうした名詞の分類がその言語のほとんどすべての文法体系をも支配するという現象が見られるのである。

バントゥー諸語を代表するスワヒリ語の例を見てみよう。そこでは名詞は、人間、植物、事物、抽象概念等々の基準に従って15のクラスに分けられ、それぞれのクラスに応じた特定の接辞が付けられる。たとえば「人間」という名詞には、m- が付けられて "mtu" となるし、「ベッド」や「村」、「スワヒリ語」のような「事物」であれば、それぞれ "kitanda", "kijiji", "kiswahili" というように、ki- という接辞が付される。しかし、スワヒリ語では、こうした名詞の分類は、名詞を修飾する形容詞にまで影響を及ぼし、形容詞は、それが修飾する名詞のクラスに応じて、その名詞と同じ接尾辞を付けなければならないのである。たとえば、"kisu kidogo kimoja" 「一つの (-moya) 小さな (-dogo) ナイフ (kisu)」のようにである。また、名詞と動詞も呼応しなければならず、動詞は、その主語である名詞のクラスに対応した接頭辞をとるのである。"Mtu mmoja atatosha." 「一人の (mmoja) 人間 (mtu) で十分であろう」という文の場合、m- は「人間」に付く類別接頭辞であるが、それに対応する動詞⁴²⁾には、接頭辞 a- が付されなければならないのである。

このようにバントゥー諸語の場合には、名詞の分類がその言語の文法体系の大部分にまで影響を及ぼしており、名詞、ひいては外界に存在しているあらゆる対象の分類が、その言語構造の根底をなしている。バントゥー諸語における

41) 同論文、57-58頁。

42) 宮本正興「名詞のクラス」(月刊『言語』、大修館書店、1993年10月号、28-35頁)、また『言語学大辞典』第6巻、「文法類」の項(1200頁以下)を参照。

ような広範かつ精緻な名詞＝対象分類を眼にすると、名詞あるいは事物を分類するというのが、人間の言語活動、さらには精神活動の基本をなしているのではないかと思われてくる。

Ⅶ おわりに

助数詞であれ類別詞であれ、それらは従来、ともすれば、それらがなかったとしても言語的にはさほど困らない〈余剰物〉のように見なされがちであった。とくにヨーロッパ系の言語、近代に至って世界のなかで政治的・経済的に優位に立った国々の言語には、助数詞や類別詞のような言語現象がなかったために、それらを多数有している言語が原始的な言語であると見下されることもあった。また、助数詞言語において、対象が変わるたびごとに、いちいち具体的に形状や材質等を示すような形態語（素）を付けなければいけないというのは、その言語の話者たちに抽象的認識力・普遍的思考力が欠けている証拠であると断じられることさえあったのである。

しかし、これまでの考察から明らかなように、助数詞・類別詞は、決して余計物でも不用物でもなく、意味論的に様々な機能を果たしている有用な文法現象なのであり、また人々がコミュニケーションをおこなう際には、その適切な使い分けを通していろいろなニュアンス、話者の態度、社会言語学的なコンテクスト等を表出するという大切な働きをも有しているのである。さらに、助数詞・類別詞による名詞＝対象分類は、それをおこなっている話者の対象認識・表象体系の諸特性を如実に反映している点で、その言語の話者集団が共有している世界観・価値観を解明するための重要な鍵の一つにもなるのである。

(2000.8.10)